

た。痛みを感じるんだ！ この苦しきから気をそらせるなら、どんな痛みでもかまわない！ 恐怖におののいている自分の脳に、ユリウスは必死に言いきかせる。

マルクスはそんなふたりを警戒の目で観察していた。以前に父が、ハチに首を刺され、その傷を母が手当てしているのをじっと見ていたことがある。母はいまのアウレリアと同じように、緊張している父にかがみこみ、優しくていねいに、傷を指で押して毒を出していた。こうすると痛いけれど、がまんしてねと言いながら。それが愛であるとわかるぐらいに、いまはマルクスも成長していた。

もし皇帝がそれに気づいたらどうなるか。一頭のトラがどれだけ暴れようと、皇帝が激怒すれば、その足下にも及ばないだろう！

6 アウレリアも闘技場へ

ブルートの準備が万全にととのった。

訓練師には確信があつて、ずいぶん誇らしげにブルートにそれを伝えた。まるでその骨も、筋も、牙も、爪も、トラ一頭をすべて自分の手で行くとしたかのようだった。ブルートには人間の言葉はわからないが、それでも二本足が興奮して、うずうずしているのを感じ取り、これまでとはちがう何か起きるのだと感づいていた。闘技場の地下の、暗くて不快な岩穴に閉じこめられているほかの動物たちも、それに気づいて落ち着き無くし、警戒信号を発していた。とりわけ年老いたクマはそうだった。これまですべてを見てきた彼には、仕込まれてきた動物が闘技に出る日が近いのを敏感に察知できた。

そういう信号を受けとめれば普通は脅えるはずが、ブルートはそうではなかった。たまらない興奮に全身がじんじんして、むしろ快感を覚え、毛を逆立てて、舌からよだれが垂